

独思録：「歳末風景」(12/13)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

キリン食生活文化研究所によれば、「冬の4大イベント」とは、「お正月」「クリスマス」「大みそか」「忘年会」だそうです。

キリン食生活文化研究所は、「冬(12月～2月)」の行事・イベントに関する意識調査を全国の20歳以上の男女3544人に対して行ない、その結果を2009年12月3日に公表しています。

調査結果は、「お正月」(66.3%)「クリスマス」(63.2%)「大みそか」(45.5%)という順となった。「忘年会」(42.5%)は4位だったそうです。

年代別に見ると、「クリスマスが楽しみ」と答えた人は、20代では76.9%に上ったが、50代では50.2%にとどまり、一方、「忘年会が楽しみ」と答えた人は、50代では48.1%となったのに対し、20代では37.0%と10ポイント以上低く、年代による違いが表れています。

ただし、忘年会が若者に敬遠されているわけではなく、「今年、忘年会に行きたいか」という問いには、「ぜひ行きたい」「できれば行きたい」「誘われれば行くと思う」とした人は全体で84.9%。20代でも86.8%となり、年代で大きな違いは見られなかったと結んでいます。

では、大正から昭和にかけての「冬」はどうだったのでしょうか。

芥川龍之介のエッセイによると、

『年末の一日』に、

伯母や妻は座敷の縁側にせっせと硝子戸を磨いていた。がたがた言うのはこの音だった。袖無(そでな)しの上へ襷(たすき)をかけた伯母はバケツの雑巾(ぞうきん)を絞りながら、多少僕にからかうように「お前、もう十二時ですよ」と言った。成程十二時に違いなかった。廊下を抜けた茶の間にはいつか古い長火鉢の前に昼飯の支度も出来上っていた。のみならず母は次男の多加志(たかし)に牛乳やトオストを養っていた。しかし僕は習慣上朝らしい気もちを持ったまま、人気のない台所へ顔を洗いにいった。

朝飯(あさめし)兼昼飯(ひるめし)をすませた後、僕は書斎の置(お)き炬燵(ごたつ)へはいり、二三種の新聞を読みはじめた。新聞の記事は諸会社のポオナスや羽子板の売れ行きで持ち切っていた。けれども僕の心もちは少しも陽気にはならなかった。僕は仕事をすませる度に妙に弱るのを常としていた。それは房後の疲労のようにどうすることも出来ないものだった。……

という行があり、その後、K君と夏目漱石の墓に参り、それから東洋文庫にいる或友だちを尋ね、友達と忘年会でもしたのでしょうか？ 酔った勢いか、動坂で穢(きたな)い気もちした車を押してやったりしています。

年末の新聞は、昔も今と同じように、「諸会社のポオナス」や「物の売れ行き」が紙面を

賑わし、家庭では、女性達は家の大掃除（煤払い）で忙しく、また、男性、特に芥川龍之介のような作家は、家の中に居られて邪魔だったことを窺わせます。

また、「わが散文詩〈日本の聖母〉」では、

山田右衛門作（やまだゑもさく）は天草（あまくさ）の海べに聖母受胎（じゆたい）の油画（あぶらゑ）を作つた。するとその夜（よ）聖母「まりや」は夢の階段を踏みながら、彼の枕もとへ下（くだ）つて来た。

「右衛門作（ゑもさく）！ これは誰の姿ぢや？」

「まりや」は画（ゑ）の前に立ち止まると、不服さうに彼を振り返つた。

「あなた様のお姿でございます。」

「わたしの姿！ これがわたしに似てゐるであらうか、この顔の黄色い娘が？」

「わたしはこの国の娘のやうに、あなた様のお姿を描（か）き上げました。しかもこれは御覧の通り、田植（たうゑ）の装束（しやうぞく）でございます。けれども円光（ゑんくわう）でございますから、世の常の女人（によにん）とは思はれますまい。」

「勿論かやうなお姿にしたのは御意（ぎよい）に入らぬことでございます。しかしわたしは御承知の通り、日本の画師（ゑし）でございます。日本の画師はあなた様さへ、日本人にする外（ほか）はございますまい。何（なん）とさやうではございませんか？」

「まりや」はやつと得心（とくしん）したやうに、天上の微笑（びせう）を輝かせた。それから又星月夜の空へしづしづとひとり昇つて行つた。……

とあり、

芥川龍之介のような知識人を除けば、まだまだ聖母マリアに関しても、「クリスマス」という行事に関しても、知らない人々の方が多かつたようで、大正十一年十二月付けのこのエッセイで聖母マリアの説明を、日本人にも分るような言い方でしています。

以上から、偏見と独断ですが、当時の「冬」の4大イベントは、「クリスマス」は落ち、「家の大掃除」が代りに入っていたと考えます。



<煤払い>

煤払いは、別名「煤掃き」とも言い、新年を迎える準備として行ふ年末の大掃除を指しました。江戸時代には、江戸城をはじめとして12月13日を煤払いの日として定めていた

ようです。この12月13日は、歳神様を迎える行事でもある正月事始めの日にも当たり、昔からこの日に門松の原材料やお雑煮を炊くための薪を山へ拾いに行くのが慣例でした。江戸時代の中期まで使用されていた宣明暦では、旧暦の12月13日は必ず「鬼の日」になっており、鬼の日は結婚式以外なら吉といわれていたため、歳神様を迎えるために煤払いと正月事始めの日として認識されていました。

そのためか、元禄15年12月14日深夜、元赤穂藩士大石内蔵助良雄以下47名が高家吉良上野介義央の屋敷に討ち入ったとき、隣の屋敷の者たちが、まだ煤払いをやっているとはご丁寧なことだと嘲笑し、討ち入りには気付かなかったとのエピソードもあったとか、言われています。



<芥川龍之介（1892-1927）>

小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼。東京市京橋区入船町生まれ。東京帝国大学文科大学英文学科卒。

1916年12月より海軍機関学校の嘱託教官（担当は英語）として教鞭を執るかたわら創作に励み、翌年5月には初の短編集『羅生門』を刊行、その後も短編作品を次々に発表し、11月には第二短編集『煙草と悪魔』を発売。1918年、教職を辞して大阪毎日新聞社に入社。

その作品の多くは短編で、『芋粥』『藪の中』『地獄変』『歯車』など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。また『蜘蛛の糸』『杜子春』など、童話も書いている。

芥川の業績を記念して菊池寛が芥川龍之介賞を設けた。



春秋：「新しい手帳」(12/8)

デジタル機器を使っている人は別だが、いまはスケジュール管理が面倒な時期だ。2009年版の手帳は、来年1月半ばまでしか書き込めない。それ以降の予定は余白に書くしかないから、新しい手帳に切り替える時に写し忘れやすい。

それでも12月半ばに新しい手帳に切り替える時には、新鮮な気持ちになる。いま使っている今年の手帳を見る。2月あたりまでは、それ以降と比べ、ずっと丁寧な字で書いてある。日記も同じ。年の初めは字もきれいだし、記述も多い。「我が生は淋(さび)しからずや日記買ふ」(高浜虚子)。来る年への決意が伝わる。

右の句の季語は「日記買ふ」。12月に使う。日記と同じく新年用商品であるカルタは当然、1月の季語。歳時記を見なくても、基本的な季語を学べるカルタを最近見つけた。女性だけのグループ「俳句座 シーズンズ」が作った「トコトコ季語かるた」。俳句が書かれた字札を読み、季語のイメージの絵札をとる。

使われた句は「雑煮椀(わん)母が最後に卓につき」のように、女性の視点が面白い。「白鳥の首を伸ばして目覚めけり」の季語は白鳥。冬の寒さを元気に変える。冬の後には春が来る。「水温(ぬる)むふるさとの空いつも青」。雪や氷は解け、水も温かくなる。日本経済が水温むのはいつだろう。新しい手帳を手に、そう思う。

<高浜虚子(1874-1959)>

俳人、小説家。本名・高濱清。愛媛県松山市生まれ。

伊予尋常中学(現在の愛媛県立松山東高校)在学中、正岡子規に兄事、俳句を教わり子規より虚子の号を受ける。

柳原極堂が松山で創刊した俳誌「ほととぎす」に参加。

後に、虚子が引き継ぎ東京に移転し俳句だけでなく、和歌、散文などを加えて俳句文芸誌として再出発。

ホトトギスの理念となる「客観写生」「花鳥諷詠」を提唱。

子規の死後、俳句の創作を辞め、その後は小説の創作に没頭。

句集に『虚子句集』『五百句』『五百五十句』『六百句』『虚子俳話』『句日記』、小説集に『鶏頭』『柿二つ』『俳諧師』『虹』など。



天声人語：「年の瀬恒例の創作四字熟語」(12/11)

有権者の抜きはなつた刃が日本の政治を袈裟懸(けさが)けにした。これぞ「一票両断」。住友生命が募った年の瀬恒例の創作四字熟語に、一年を振り返る名作迷作が多く寄せられた。

寒空の炊き出しで今年は明けた。派遣切りや雇い止めで仕事を失った人々が「断雇(だんこ)反対」を叫んだ。夏の選挙で永田町はひっくり返る。「政権好待(こうたい)」が実現したが、新政権の「鳩世済民(きゅうせいさいみん)」の手腕はいかに。

新型インフルエンザが上陸すると、店頭からマスクが消えた。日本中が「顔面総白」となって、来訪の外国人も驚いた。うつされてはたまらないと、通勤電車も人ごみも「一咳(いっせき)触発」でピリピリする。予防したくてもワクチンは足りず、切歯扼腕(せつしやくわん)ならぬ「接種待腕(まつわん)」がなお続く。

高速道路の「千円」は功罪が半ばした。喜々として「遠奔千走(とおほんせんそう)」する人もあれば、「千車万列」の大渋滞にプロの運転手は泣かされ、客をとられた鉄道も船も泣いた。暦の魔術で初の「秋休五日」(シルバーウィーク)となったものの、どこもかしこもやはり渋滞。

「司民参加」の裁判員制度が始まり、「判官判民」の裁きに市民感覚がにじみ出た。白昼の天体ショーは「皆祈日食」で晴天を待ったが、悪石島は無情の雨。米国では旅客機が川に奇跡の不時着。「一機冬川(いっきとうせん)」の機長の離れ業が喝采を浴びた。

この人を忘れてはいけない。石川遼君めあての「一目遼戦(りょうせん)」のギャラリーでゴルフ界はわいた。国宝の阿修羅像展も長蛇の盛況となり、多くの人が「阿美共感(あびきょうかん)」した。ゆく年に、忘れ得ぬあのまなざしが、ふと胸をよぎる。

毎日：「創作四字熟語：政権交代、新型インフル...今年の世相」(12/11)

住友生命保険は10日、1年間の世相を漢字4文字で振り返る恒例の「創作四字熟語」ベスト50作品を発表した。政権交代を選択した国民の一票の力強さを示す「一票両断(いっぴょうりょうだん)(一刀両断)」、新型インフルエンザの流行でマスク姿の人が急増した様子を表した「顔面総白(がんめんそうはく)(顔面蒼白)」など、政治や社会問題を風刺する作品が目立った。

「非正規切り」など雇用削減を批判する「断雇反対(だんこはんたい)(断固反対)」など厳しい経済状況を反映した熟語も。1000円以下のジーンズが人気を呼んだ「G販沈価(じーばんちんか)(地盤沈下)」、古着の下取りセールsの宣伝効果をもじった「下取宣効(かとりせんこう)(蚊取線香)」など、デフレに翻弄(ほんろう)される消費者や企業を描いた作品も多かった。

今回で20回目。10~11月に6085の作品が寄せられ、歌人の俵万智さんが審査した。



遠奔千走

(東奔西走)

秋休五日

(週休二日)

一票両断

(二刀両断)

司民参加

(市民参加)

顔面総白

(顔面蒼白)

薬禍騒乱

(百花繚乱)

始終婚活

(死中求活)

非核大賞

(比較対象)

五輪夢終

(五里霧中)

電圧速帝

(電圧測定)

編集手帳：「未来に羽ばたける名前」(12/9)

少し前の読売歌壇で名前の歌を読んだ。以上百三十名の新一年生「ナニお」「ナニこ」と呼ぶ名聞かざりき 坂戸市 神田真人。

きのうの朝刊に載った人気ベスト10にも「ナニお」「ナニこ」は見当たらない。今年生まれた赤ちゃんの名前は、男の子が4年連続で「大翔」(ひろと、など)、女の子は前年4位「凜」(りん)が1位だったという。

「翔」という字で思い出す人がいる。奈良時代の遣唐留学生、阿倍仲麻呂の従者として唐に渡った羽栗吉麻呂は向こうの女性と結婚し、二人の男児をもうけた。鳥のように翼をひろげ、大空を翔(か)けて祖国・日本に帰りたい。胸を焦がす望郷の思いから父親は「翔」(かける)、「翼」(たすく)と名づけたという。

子供の命名にはなにがしか、親がいまの世でかなえられぬ夢が託されているだろう。不景気と新型インフルに翻弄(ほんろう)された一年、「翔」や「凜」の字とは誰しも、縁が薄かったようである。

その名の通り、凜々(りり)しく羽ばたける未来を迎えられるといい。君たちのお父さんやお母さんと一緒に、おじさんも腕まくりをしよう 初々しい名前たちにつぶやく。

<阿倍仲麻呂(698-770)>

奈良時代の遣唐使の一員。大和国生まれ。中国名は晁衡(ちょうこう)。藤原不比等の推薦により元正天皇の勅命を受けて、唐の玄宗から『金烏玉兔集』を借り受けて持ち帰るために遣唐使に命じられた。唐に着いた仲麻呂は、その才能により玄宗に重用され、科挙にも合格、唐朝諸官を歴任して高官に登ったため、日本への帰国を果たせなかった。

続いて遣唐使として派遣されて唐に来た吉備真備を助け、難解な「野馬台の詩」の解説や、『金烏玉兔集』を持ち帰る手助けをしている。

また、仲麻呂の子である満月丸が、後の安倍晴明の先祖にあたるとされる。

<羽栗吉麻呂(生没年不詳)>

奈良時代の僱人。阿倍仲麻呂の従者。

716年(霊龜2年)遣唐使に阿倍仲麻呂の僱人として入唐。唐人の女性と婚姻し、719年(養老3年)に羽栗翼が誕生している。その後、羽栗翔も唐で誕生している。

733年(天平5年)多治比広成が率いる遣唐使が来唐し、阿倍仲麻呂はそのまま唐に留まったが、吉麻呂は息子たちとともに帰国の途につき、翌年無事帰国を果たす。

736年(天平8年)の遣新羅使の歌った歌の中に『羽栗』作のものがあ、これが吉麻呂によるものであるとする説がある。これが事実ならば、羽栗吉麻呂もこの時の遣新羅使に加わっていたことになる。



憂楽帳：「ハイボール」(12/10)

1面の企画「チェンジ」でも取り上げたが、酒類業界で今年最大の話題は「ハイボール」の復権だった。女優・小雪さんのCM効果恐るべし(私も大ファン)。ただ、ブームには別の事情もあると、寂しい懐が語っている。

一時期、店頭でソーダ水が売り切れるほどの状況は「家飲み派」のおじさんたちが作り出した。安いのだ、これが。500ミリリットルボトルが約100円で、ウイスキー代を入れても同量の缶ビールの半値以下。しかも、第3の××を飲む時のような代替感がない。つまり貧乏くさくないのだ。

思えば、ウイスキーほど安くなったものも少ない。80年代の学生時代、酒屋で1万円近かったワイルドターキーが今や2000円台。輸入物は総じて5～8割引きの印象だ。気分や体調で濃さを調節できるのも、ビールにない良さ。周囲でも「家飲みはハイボールが多い」という知人が増えた。

そんなご同輩に年末、少しだけぜいたくの勧め。クリスタルのグラスと金属の器で凍らせた大きめの氷だ。透き通った音は、味わいを1ランク上げてくれる。グラス代は今年ご自分へのご褒美として、いかが？

<小雪(1976-)>

女優。神奈川県座間市出身。本名加藤小雪。

高校3年の時に、ファッション雑誌『non-no』の読者モデルに応募し、同誌専属モデルとなる。

1998年、テレビドラマ『恋はあせらず』のヒロインに抜擢され、以降、ドラマや映画、CM等多に出演。2000年、パリ・コレクションにファッションモデルとして参加。翌年以降も参加を続けている。

2003年、米国映画『ラストサムライ』で日本を代表する女優として名を知られることになる。同年、第75回アカデミー賞授賞式の案内役(司会)を務める。

2005年から、グローバルな貧困根絶キャンペーン「ほっとけない世界のまずしさキャンペーン」に参加。

